



営農NEWS



水稻育苗の準備にあたって注意すること

気象の長期 3 ヶ月予報によりますと、「関東地方の 3 月の天候は平年並か低い影響で、桜の開花が平年より 3 日程度遅くなる見込みですが、4 月、5 月は平年並の天候」と予想されています。春にむかって、水稻の育苗や田植えの準備をそろそろ始める時期となりました。

昔から「苗半作」と言われるように、水稻の生育や収穫の良し悪しは苗の出来具合が大きく左右するとされてきました。生育が揃い、田植後の活着が良好で、病害虫に侵されていない良苗づくりを目指して、まずは播種までの準備作業を進めてください。

1 資材などの準備

育苗ハウスの清掃や補修、種子、培土、育苗箱（ケミクロンGやイチバンで消毒）、保温資材（太陽シート等）、バケツや桶、催芽器や播種機など、育苗に使用するものが準備できているか、動作の確認や調整をしておきましょう。

2 種子消毒と浸種

水稻種子は毎年更新するのが基本です。JAから購入した消毒種子は、種子殺菌剤（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と殺虫剤（対象害虫：イネシガラセンチュウ）が吹付け処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。

日	1 2 3日	4 ~ 12日		
	種子消毒のための浸種	催芽のための浸種	催芽	播種
作業の内容	種籾 1kg に水約 4ℓ 3 日間は水の交換をしない	水の交換を適時、 静かに行う	28～30℃で 15～20 時間 加温し、ハト 胸程度にする	乾籾で 1 箱当 たり 140～ 160g を目安 にする
	この期間、水温は 10～15℃とし、水温積算温度（水温×日数） で 100～120℃（水温 10℃で 10～12 日間）を目安にしましょう			
	「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「ふくまる」では 120℃（水温 10℃ で 12 日間または 15℃で 8 日間）、「ゆめひたち」では 110℃、そ の他の品種では 100℃が目安です			

注意 ①催芽のための浸種期間中は、1～2 日おきに水を交換しましょう。酸素の補給とともに、発芽阻害物質の除去などで重要です。また、時々タネ籾を攪拌することにより、水温や酸素吸収の均一化を図りましょう。

※未消毒種子の場合は、塩水選（比重 1.13）で籾を選別し、次のいずれかの種子消毒を行った後に浸種や催芽、播種作業に入ります。

- 1) 温湯消毒：60℃に保った温湯に種子を 10 分間浸漬処理し、処理後は水中で速やかに冷却します。
- 2) 生物農薬（エコホープ、エコホープD、タフブロックなど）は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理しましょう。
- 3) 化学農薬（モミガードC・DF、テクリードCフロアブル、スポルタックスターナSEなど）の規定量薬液の中で種籾（袋）を良くゆすって薬液を均一に付着させます。長期間浸漬の場合は、浸漬中に 1～2 回攪拌してください。防除効果を安定させるため、水温は 10～15℃に保ちましょう。処理後は水洗いせず、浸種作業に入ります。なお、必ず各薬剤の使用方法を確認し、適正に処理してください。

3 種子の催芽

28～30℃で 15～20 時間加温し、出芽を揃えるために必ずハト胸状態にします。この処理中に高温になりすぎるともみ枯細菌病などの病害発生を助長しますので、十分気をつけて適正管理に努めましょう。また、ハウス内や良く日のあたる場所で管理すると、昼間に予想以上の高温になる場合がありますので、注意が必要です。

4 育苗培土

JAの水稻用消毒済み培土（いばらき培土、苗みどり など）を使用しましょう。なお、未消毒の山土などを使用する場合には、薬剤（タチガレエースM粉剤、ダコニール粉剤など）を土壤混和または播種時に散布（ダコレート水和剤、タチガレエースM液剤など）処理すると、初期病害の発生を抑制できます。なお、各登録薬剤（平成 26 年 3 月 3 日現在）は、対象病害や処理方法が異なりますので、必ず確認してください。

農薬を使用する際には、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040